

二代目市川團十郎の日記詳解 第五回

（享保十九（一七三四）年五月八日～十五日）

BJÖRK, Tove Johanna *

【要旨】本稿で、享保期江戸歌舞伎界で活躍した二代目市川團十郎（元禄元（一六八八）年～宝暦八（一七五八）年）の日記を詳しく読解する。文献が少ない江戸享保期における貴重な資料でありながら、これまで分析されることがなかった二代目團十郎の日記には、舞台制作の詳細はもとより歌舞伎役者の日常生活が縷々綴られている。これらを読み解くことで、当時の歌舞伎役者のありのままの姿を、また歌舞伎界の転換期とされる享保期江戸歌舞伎の実態を解明していく。
キーワード：二代目市川團十郎、歌舞伎、俳諧

はじめに

享保期江戸歌舞伎界で活躍した二代目市川團十郎（元禄元（一六八八）年～宝暦八（一七五八）年）が記した日記について注を付し、解説する。

日記本の成立や特徴、注釈書の概要、そして本稿の意図については「第一回」に詳述した。

第一回（享保十八（一七三三）年十一月～同十九（一七三四）年一月）『埼玉大学紀要 教養学部』第五二巻第二号）

第二回（享保十九年二月十日～三〇日）『埼玉大学紀

要 教養学部』第五三巻第一号）

第三回（享保十九年三月三日～十九日）『埼玉大学紀要 教養学部』第五三巻第二号）

第四回（享保十九年四月三日～五月五日）『埼玉大学紀要 教養学部』第五六巻第一号）

凡 例

一、日記原文は『資料集成二世市川團十郎』（和泉書店、一九八八年刊）による。本稿では日記原文はゴシック体で、注は八ポイントで記した。

* ビニールク・トーヴェ・ヨハンナ、埼玉大学大学院人文社会科学部研究科・准教授

二、日記原文冒頭の記号▽○●△▼は写本を示す。

写本一覽

▽「老のたのしみ」

○「柿表紙」

●「栢筵日記」

△「病中日記」

▼「市川團十郎日記発句集」

三、「老のたのしみ」「柿表紙」「栢筵日記」には注釈書がある。日記原文の該当字句に対する注をすべて「」でくくって引用し、注釈書名を略号へで示した。

注釈書一覽

岩本活東子注「老のたのしみ抄」『燕石十種』文久元

（二八六一）年編、市島謙吉活字編明治三十九年（新版

中央公論社、一九八〇年刊）〈老岩〉

内藤耻叟・小宮山綏介注「老の樂」『温知叢書』博文館、

明治二十四年刊）〈老内〉

博文館編輯局校訂「老の樂」〔校訂俳優全集〕博文館、

明治三十四年刊）〈老博〉

郡司正勝註「老のたのしみ抄」〔近世芸道論〕日本思

想体系（六一）、岩波書店、一九七二年刊）〈老郡〉

伊原青々園注「柿表紙」『栢筵遺筆集』、大正六年写、

早稲田大学演劇博物館蔵）〈柿〉

伊原青々園注「栢筵日記」〔栢筵遺筆集〕、大正六年写、

早稲田大学演劇博物館蔵）〈栢〉

四、引用文の約物は省略した。

五、出典記載のない役者評判記は『歌舞伎評判記集成』（岩

波書店、一九七二〜一九七七年刊）から引用した。

六、出典記載のない注は『日本大百科全書』『日本国語大

辞典』『仏教語大辞典』『日本人名辞典』『世界文学大事典』

『歌舞伎事典』『国書人名辞典』を参照した。

七、日記原文の略字・俗字は正字に正し、注番号は漢数

字を、解説文の注番号はアラビア数字を用いた。

八、俳諧の季語は「季・春」などと表記する。

本稿は独立行政法人日本学術振興会平成三十年度科学研究費（基盤研究C、課題番号18K00312）の交付を受けて制作された。

【日記詳解】

▽八日の朝 雲津水国病死 辞世の由

さ月来ぬ人も柳に倦く頃そ

病床よりをり手水を遣ひて書候よし

- 一 雲津水国 「三世高井立志の門。俳人。大門通り花町伊勢屋（釘銅商）の二代目、佐次兵衛。三浦屋高尾を請出し、隠居させられ、剃髪して宗匠三十三歳で没（江戸真砂）」（老郡）。雲津水国。俳人。天和二（一六八二）年生、享保十九（一七三四）年没。通称は佐次兵衛。俳人貴志沾洲の門人。江戸大門通りの釘銅物商伊勢屋の二代目。三十歳のころ吉原三浦屋の遊女高尾を身請けして隠居し、俳諧の宗匠となった。郡司正勝が注に引用する『江戸真砂』（後出『江戸真砂六十帖』注二）は正しくは『江戸真砂六十帖広本』（和泉屋某著、宝暦頃成立、『燕石十種』第四卷、中央公論社、一九七九年収録）で、第八卷に水国が紹介されている。「大門通り花町伊勢屋佐次兵衛と云、釘、銅物商売して暮しぬ、二代目佐次兵衛、幼少より、手習、学問を好、二十七歳の頃より浮氣に成て、初てより三浦屋の高尾を約束して一二年逢ふ、大きに金遣ひせし故、一家、伴頭打寄、山伏井戸の武士地を借りて、夫婦隠居させ、店は番頭持なり」（大門通り花町伊勢屋何某が事）。
- 二 辞世の由。「辞世ノヨシ 江戸真砂六十帖巻八二大物通り花町伊勢屋（釘銅ノ内）二代の佐次兵衛店、三浦屋高尾を買って金をつつむ、山大井戸武家地を借りて夫婦隠居をさせらん、立志が門人となり義徳と立舞、後に落髪して、水国といひ、いいサジを言匠みしが、三十二歳にて病死すとあり、あの水国の事するべし 又曰雲津水国ハ三世高井立志の弟子也」（楯）
- 三 柳に倦く「高安本『倦し比、とぞ』（老郡）。

病床に伏していた水国の訃報とともに辞世の句が届けられたという。追善句集『雨のをくり』には「四五日の後月うつりなやみ甚しければ其身もたゝならすおもひけるにや三日の巳の刻はかりにやうやく起なをり立国に抱られ手洗ひ口すゝきぬ婢を退け庭の柳の影ふかきに自ら筆をとつて其いふことよしとや」とあり、自分の死を覚悟した水国が庭の柳を見て詠んだという。春の季語である柳も五月になればひとびとから飽きられてしまっただろう。水国は、あるいは自身を柳にたとえたのだろうか。



図1 水国（俳諧集『たつのうら』）

1 大國編『雨のをくり』(享保十九(一七三四)年頃『関東俳諧叢書』第一巻収録、青裳堂書店、一九九三年)。追善書『雨のをくり』は江戸座の俳人らが水国を思う句を詠み、合作した俳諧集。その制作について五月十日〇(第五回)および五月十四日▽(第五回)参照。

2 米仲編『たつのうら』享保二十(一七三五)年九月序、国文学研究資料館蔵。

▽九日 辰松八郎兵衛病死 十日とむらひ

一 辰松八郎兵衛 「人形遣い。おやま人形の名手。享保のはじめ江戸に下り、辰松座をおこす。寛延三年、六十六歳で没」(老郡)。人形使い。生年末詳、享保十九(一七三四)年没。大坂竹本座創設時から活躍。元禄十六(一七〇三)年、近松門左衛門作『曾根崎心中』で女性主人公お初の人形をつかい評判となった。宝永四(一七〇七)年、豊竹若太夫と豊竹座を再興、のち江戸で辰松座を興した。

郡司正勝は辰松八郎兵衛の没年を寛延三(一七五〇)年とするが、これは初代八郎兵衛の弟、二代目八郎兵衛の没年の誤りであろう。

▽十日 雨天朝 素丸丈御出 子息の追善の摺物御持参

一 素丸「其日庵三世 溝口十太丈素丸ハ五色墨の一人」(柿)「溝口素丸。其日庵三世。五色墨の一人。宝暦元年没」(老郡)。俳人二代目溝口素丸。幕臣。正徳三(一七一三)年生、寛政七(一七九五)年没。吉田氏、のち溝口氏。本姓源、名勝政、通称十太夫。号白芹・三代目其日庵等。吉田梅庵郷直の息子、幕臣溝口忠勝の養子。享保十八(一七三三)年家を継ぎ、同二十(一七三五)年から小姓組に列し、元文二(一七三七)年から江戸城西丸に勤仕。俳諧は享保十七、十八年頃から初代素丸(可夕、後出、次項注二)に入門し、延享三(一七四六)年頃、四代目其日庵となる。「柿表紙」が記す俳諧集『五色墨』(享保十六(一七三二)年刊『中興俳諧名家集』収録(日本俳書体系第十巻、日本国書センター、一九九五年)注釈も含む)は初代素丸の著書。長水・素丸・咫尺・蓮之・宗瑞ら、江戸座の厳格な様式に反発した作品が掲載されているという。

伊原青々園と郡司正勝が注にいう「其日庵三世」は初代素丸(「可夕」)のこと。ここに記されている素丸は二代目で、このとき二十一歳、亡くした子は幼かっただろう。追善の摺物については未詳。

○其朝 習魚文ヨリ文通 子息可夕文画ノ扇子二本 徳

弁ノ方へ来ル

習魚は江戸座の俳人の印鑑を作っており、二代目團十郎も「雨夜庵」などの印鑑を習魚に依頼した。¹

一 習魚 「類柑子下巻の鳥合の句三アリ」(柿)。生没年未詳。「類柑子」とは宝井其角編俳諧集『類柑子』(宝永四(一七〇七)年跋)で、「鬪鶏句合」内に「黄昏餌けふの手がらに宥しけり」「めつたに勝鬪鶏野の筋と召されけり」「義の端の萌る思ひを鶯より」「茶筌尾の鏝をたゞくいさみかな」「相暹羅の勢を颯や花曇り」「撮距小荷駄奉行の隠れけり」の六句収録(『元禄名家句選』日本俳書大系第六卷、日本国書センター、一九九五年)。「鬪鶏句合」は元禄十七(一七〇四)年三月、備中松山藩藩主安藤信友(俳号冠里)が江戸屋敷で催した、鬪鶏をテーマとする句会の作品集(稲葉有祐著『宝井其角と都会派俳諧』笠間書院、二〇一八年)。習魚はここで俳人可夕(長谷川馬光・初代溝口素丸)の父とされており、須田宗入盛直あるいは養親長谷川直隆か。

二 可夕 「二世其日庵素丸也後ニ馬光といふ、夕可庵ともいふ小十人長谷川半左衛門、宝曆辛未五月十日没」(柿)。初代溝口素丸(長谷川馬光。俳人・幕臣。貞享二(一六八五)年生、寛延四・宝暦元(一七五二)年没。本姓藤原。はじめ須田氏、のち長谷川氏。名直行、通称半左衛門。号白芹・馬光。二代目其日庵。夕可庵等。陸奥津軽藩医者須田宗入盛直の次男、従兄の幕臣長谷川直隆の養子。享保十(一七二六)年、小十人組に列す。素堂に俳諧を学び、師の初代其日庵を継ぐ。江戸座俳諧壇を批判する『五色墨』の著者で、享保二十一(一七三六)年、馬光と改む。

三 徳弁 三代目市川團十郎の俳号。享保十九年二月十八日〇(第二回)参照。

1 「昼習魚文へ石印ノコト頼ム書状遣ス」享保十九年八月二十五日〇(未刊)、「昼過頃習魚文ヨリ石章来ル 是出増田殿頼ノ印石也」同年九月三日〇(未刊)、「習魚文へ印石遣す」同年九月十二日▽(未刊)、「習魚子湖十子ガ印名遣ス 升五郎ガ富士ノ印 人形ノ印ノコトモ頼遣ス」同年十月十一日〇(未刊)。

○小田原ヨリ清八来ル

一 清八 小田原回祿(享保十九年二月晦日〇(第二回)参照)と関係する人物か。

二代目團十郎は享保三(一七二八)年正月、「若緑勢會我」(森田座)において、初めて外郎売りを演じた。小田原の外郎売商人虎屋藤右衛門の名で舞台に現れ、外郎の宣伝をセリフに取り入れた。「外郎売り」は二代目團十郎の物売りを代表とする芸となり、のちに歌舞伎十八番にも収められた。二代目團十郎は小田原の火災についての

連絡を受け取り（享保十九年二月二十九日〇〔第二回〕、温泉旅行中に小田原に泊まる（享保十九年四月三日〇〔第四回〕）など、縁のある場所だったようだ。

〇近木権右衛門ヨリ松浦クジラ来ル

一 近木権右衛門「後にも出ヅ、松浦候の家来」（柿）。松浦候とは平戸藩（現長崎県）藩主松浦篤信、歌舞伎の常連客で二代目および三代目團十郎の鼻貞。伊原青々園は近木権右衛門を後出とするが、現存する日記本には見当たらない。

二 松浦クジラ 平戸藩松浦の鯨肉。平戸藩は元禄期から盛んに捕鯨を行い、享保期、藩内には中尾組・土肥組・益富組などが生月島御崎浦、老岐勝本浦、瀬戸浦を中心に捕鯨を行った（末田智樹著「寛政前期平戸藩領域における捕鯨業の―様相―増富大嶋組の運上資料から探る」『神奈川大学国際常民文化研究機構年報』四号、二〇一二年）。享保七（一七二二）年、捕鯨業者井元弥七左衛門から銀二千百貫目を受け取るなど、捕鯨は当時の平戸藩における重要な産業であった（岩崎義則著「捕鯨業者井元弥七左衛門と平戸藩」井元家文書の伝来とその分析『史淵』一四七号、二〇一〇年）。

歌舞伎鼻貞だった藩主松浦篤信は二代目團十郎と親しく交流しており、享保十九年八月十五日▽（未刊）にも

二代目團十郎に季節の贈物をしている。

〇椿昌ヨリ伊物染筆出来

一 椿昌 市村座の脇作者。「朝ノ内椿呂（昌カ）呼三番メ詰書ク」（享保十九年九月二十一日〇〔第二回〕 参照）。

二 伊物染筆 未詳。「伊物」は伊勢物語を示す。『伊物吾言抄』（都宮隆哲著、元禄十五年序）のような『伊勢物語』の注釈書の写本または絵か。

当時二代目團十郎が出演していた市村座の立作者津内治兵衛（俳号英子）が享保十九（一七三四）年九月二日〇、中村座に移籍した際、椿昌が二代目團十郎にこれを報告した。その後、後任の立作者として市村座に着任した江田弥市（俳号富百）らとともに十一月上演の顔見世狂言「陸奥弓勢源氏」制作に携わるなどした。¹

1 享保十九年十月五日〇（未刊）、拙著『二代目市川團十郎の日記にみる享保期江戸歌舞伎』（文学通信、二〇一九年刊）参照。

▽暁雨丈へ鱒をおくる 其夜湖十亭にて湖萍丈もよほし
半鱗追善のはいかい予も出座

一 暁雨 「十八大口屋藏前」(柿)「浅草藏前大口次兵衛」(老博)。「京伝注」暁雨ハ浅草藏前、大口次兵衛。十八大通の一人。札差。助六のモデルという(老郡)。大口屋治(次)兵衛は江戸出身。号は暁雨、暁翁。江戸時代中期の豪商。享保九(一七二四)年に認可された札差株仲間の起立人のひとり、江戸の通人「十八大通」の筆頭。明和四(一七六九)年札差株を売却、以後の動静は不詳。

二 湖十亭 「湖十の家。老鼠肝湖十。其角門人」(老郡)。俳人二代目深川湖十の屋敷は二代目團十郎邸に接していた(享保十九年二月十日〇(第一回)参照)。

三 湖萍 「高安本『湖口評点もよふし』(老郡)。俳人初代深川湖十。享保十九年二月十日〇(第二回)参照。

四 半鱗 俳人林半鱗(生没未詳。桑岡貞佐(享保十九年五月十日▽[第五回]参照)選『春夏之賦』(正徳六(一七一六)年刊)、水間沾徳(寛文二(一六六二)年生、享保十一(一七二六)年没)編『百福寿』(享保二(一七二七)年刊)、豊島露月(寛文七(一六六七)年生、寛延四(一七五二)年没)編『閨の梅』(享保十二(一七二七)年刊)、八楽庵米仲(宝永五(一七〇七)年生、明和三(一七六六)年没)編『かなあぶら』(享保二十(一七三五)年九月序)に句を掲載。『かなあぶら』には初代深川湖十(老鼠)、二代目深川湖十、初代素丸、暁雨など、前出五月十日▽〇、また後出五月十日▽に現れる俳人の句も見られる。

享保十九年五月八日に雲津水国が、十日に林半鱗が相次いで亡くなったため、深川湖十を中心に江戸座の俳人らが、二人を悼む俳諧会を開催したという。

暁雨(浅草藏前の札差大口屋治兵衛)は、二代目團十郎が「男文字曾我物語」(寛延二(一七四九)年三月、中村座初演)で演じた助六のモデルともいわれ、このときの演出は現在も上演される「助六縁江戸桜」に受け継がれているとされている³。治兵衛は江戸の男伊達として評判が高く、二代目團十郎の楽屋を訪れるなど、ふたりには交流があった。

林半鱗の作「藤浪や鵜飼を語る渡し守」⁶、「こからしや十三重の掃除番」⁷、「傘張や風のしからみ中もみち」⁸、「替籠に夢を取られて蔦紅葉」⁹には、掃除番や傘張など下級武士の職務に関わる語句が多く用いられている。また、追善集『かなあぶら』¹⁰では、裱姿で描かれていることから、半鱗は武士であったか。



図2 半鱗『かなあぶら』¹¹⁾

- 1 筆者不明『十八代通』弘化三(一八四六)年成立。
- 2 金井三笑・桜田治助著、宝暦十一年初演。天保初期に成立した歌舞伎十八番に収録された。
- 3 渡辺保著『江戸演劇史』講談社、二〇〇九年。
- 4 馬場文耕著『当世武野俗談』宝暦七(一七五七)年成立。大内屋治兵衛について「生質大丈夫にして、弱を引立、無法に強きをふせぎ」と記述している。
- 5 寛保元(一七四一)年八月二十七日▽(未刊)。
- 6 桑岡貞佐選『春夏之賦』正徳六(一七一六)年刊
- 7 水間沾徳『百福寿』享保二(一七一七)年刊

- 8 豊島露月編『閨の梅』享保十二(一七二七)年刊。
- 9 八楽庵米仲編『かなあぶら』(享保二十(一七三五)年九月序)は享保期末に死去した俳人の追善句集。
- 10 八楽庵米仲編『かなあぶら』享保二十(一七三五)年九月序。
- 11 香川大学中央図書館神原文庫蔵。

○ 神八久世町ハツビキノコホリカナ 淡々^一

山崎ニテ^二

菜ノ花ノ世界ニケフモ入日カナ^三 同

シラヌヒノツクシ白縫トモ イニシヘツクシヨリ綿子^四
 ヲ大内^七へ上事アリ ヨシシラヌ火シラ縫両説 荷葉子^九
 口語 右ハ淡々ガ連歌ニムカヒ誹諧ヲメラレテ 是
 ニテ連歌師ヲイハコメタル由 荷葉子ノハナシ也

- 一 淡々 俳人松木淡々。享保十九年五月五日○(第四回) 参照。
- 二 山崎 京都府乙訓郡大山崎町の地名か。古来、京都と大阪を結ぶ交通の要地。他に兵庫県などにも山崎がある。
- 三 菜ノ花 松木淡々編『其角十七回』(享保八(一七二三)年三月跋)、松木淡々編『淡々発句集』(延享三年刊) 収録。
- 四 シラヌヒ 白縫・不知火(後出、注八参照)。「筑紫」の掛け言葉。白縫は筑紫の国から献上された防寒衣、不知火は筑紫の海の上に見える光。

- 五 ツクシ 筑紫 九州の古称。九州全体を指す場合、九州の北、肥の国・豊国を合わせた地域を指す場合、筑前・筑後を指す場合、筑前国、もしくは大宰府を指す場合などがある。
- 六 綿子 真綿で作った防寒衣、季・冬。
- 七 大内 皇居の異称。内裏、禁中、宮中、大内山。
- 八 シラヌ火 不知火。九州の八代海や有明海に夜半点々と見られる怪火。季・秋。
- 九 荷葉子 享保十九年五月一日〇（第四回）参照。

荷葉子は、淡々の俳諧「神ハ久世」と「菜ノ花の」の二句が連歌より上出来であるとしたか。初代湖十郎で開催された半麟の追善会で荷葉子が語る「シラヌイ」や淡々の作風を記した。

1 享保十年五月十日▽（第五回）参照。

〇十日 一番目仕舞居風呂へ入居侯所へ其ワキニテ片岡丹右衛門吉左衛門トハナシ 予是ヲ聞直シ 書付置物也 丹右衛門子供ノ時金剛太夫客也 金剛太夫丹右衛門へハナシノヨシ ジャ^上ヤ^四 ウサテ御能被遊時御装束メサレ床几ニ御カへリ被成候所ニ笛ヒシギ侯トブルブ

ル御フルへ被成候 アナタサへ芸ハ御大切ニ御心ガケ被成候間 イワンヤ世ノ常ノ人イサ、カモゲイヲバ大事ニ可為事也 我等御相手ニ出ツト見申候事トカノ金剛太夫物語ノヨシ也 左御ナグサミノ御能也 ソレニサへ

- 一 一番目 当時市村座で上演していた「八棟菅源氏」の第一場。
- 二 片岡丹右衛門吉左衛門 両者未詳。丹右衛門は能を稽古していたということから武士であったか。
- 三 金剛太夫 北（喜多）七太夫。江戸初期の能役者。文禄五（一五八五）年から正保四（一六四七）年にかけて出演（片桐登著「北七太夫考」金剛大夫に於ける時期を中心に）『日本文学誌要』十五号、一九六六年。このとき丹右衛門はすでに年配だったか。
- 四 ジャ「ジャウ〇〇〇上カ浮字となるべし」（杵）。伊原青々園は原本に欠けていたと思われる三文字を本文の右側の振り仮名「シヤウ」としてゐる。
- 五 床几 室内で臨時に着席する際に用いる腰掛けの一種。脚を打違いに組み尻の当たる部分に革を張り、携帯に便利なように作ったもの。能の囃し方が使うもの。
- 六 ヒシギ 日吉・日布。笛の音名。笛特有の音。笛の楽句（『新版能・狂言事典』）。ここで笛を吹き鳴らす（拉ぐ）の意味か。
- 七 左 右か。

市村座「八棟菖源氏」の第一場出演後、二代目團十郎が銭湯で聞いた片岡丹右衛門と吉右衛門の話を書き記している。丹右衛門が幼い頃、屋敷に能役者金剛太夫が招かれた。装束を付けて舞台に出るとき、丹右衛門は日頃から稽古していたであろう笛を吹いたが、緊張からか身体が震えてしまった。それを見た金剛太夫は、幼い丹右衛門さえかくも芸を大切するのだから、ひとびとはみな、さらに芸事を大切にした方がいいと語ったという。これは能の話だが、二代目團十郎は自身の芸に引きつけている。

○一峯池道行雲年六十八歳翁書

同一行物

山花笑野鳥語

一 一峯池道雲 池永道雲。書家・篆刻家。寛文五（一六六五）年生、元文二（一七三七）年没。本姓は新山。名は榮春。通称は有右衛門。号に一峰など。初期江戸派のひとりで、著作に印譜『刀万象』『異文合愛』『享保印譜』など。

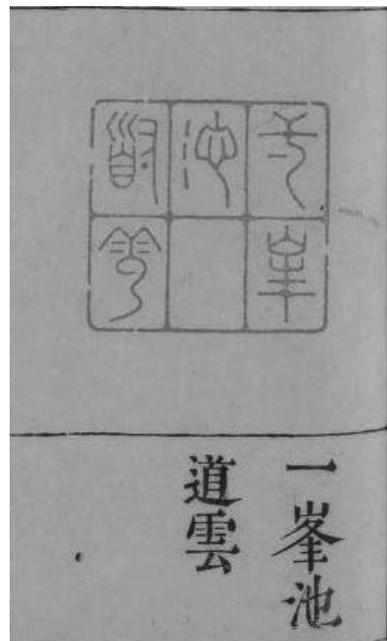


図3 印「一峯池道雲」(『刀万象』収録、国会図書館蔵)

二 一行物 文字を一行に書いた墨蹟。

三 笑 「花が開く」の意(『新選漢和辞典』)。山の花が開く。

四 語 「鳥やけものなどが鳴く」の意(『新選漢和辞典』)。

「山に花が咲き、野原に鳥が鳴く」と描写する

書家池永道雲の書について記している。

▽漸之は小野寺幸右衛門 貞佐物語 放水は岡野金右衛門九十郎事 右は貞佐門人の由 子葉は少いくひにていも顔也 はせを翁はうすいもあり 其角や嵐雪所へいく

ぞやと云 あいさつしつか成り しゆしやう成翁也 花
見車は 轍士作 鷺水手伝と貞佐物語 半鱗追善会の夜
也

一 漸之 「以下、放水、子葉、みな赤穂義士の俳名(老郡)。小野寺幸右衛門。延宝四(一六七六)年生、元禄十六(一七〇三)年没。赤穂四十七士のひとり。名は秀富。変名は仙北又介。赤穂浪士大高源吾(子葉、後出注四)の弟。元禄十五(一七〇二)年、養父小野寺十内とともに吉良邸への討ち入りに参加。

二 貞佐 「其角門人桑岡貞佐」(柿)「桑岡貞佐。其角門」(老郡)。俳人桑岡貞佐。寛文十二(一六七二)年生、享保十九(一七三四)年没。江戸出身。名は永房。通称は平三郎。宝井其角門人、大高源吾らとまじわる。編著『そのはしら』など。

三 放水 岡野金右衛門。延宝八(一六八〇)年生、元禄十六(一七〇三)年没。赤穂藩士四十七士のひとり。名は包秀。十文字槍をよくつかい、俳諧にもすぐれた。主君浅野長矩の仇を討ち、松平家にあずけられた。

四 子葉 「活東子云子葉 大高源吾(老内)。大高源吾。寛文十二(一六七二)年生、元禄十六(一七〇三)年没。赤穂四十七士のひとり。名は忠雄。中小姓、膳番元、金奉行、腰物方を兼ねた。藩主浅野長矩の死後、江戸に出て、脇屋新兵衛と変名し、吉良義央邸をさぐった。著書に『丁丑紀行』など。
五 いくひ 猪首。イノシシのように太くて短い首。太く短い首の人。
六 いも顔 「いもがさの顔。ホウソウの跡のある顔」(老郡)

七 はせを翁 「芭蕉。松尾氏。俳聖。元禄七年、五十一歳で没」(老郡)。
俳人松尾芭蕉。正保元(一六四四)年生、元禄七(一六九四)年没。伊

賀(現三重県)出身。名は宗房、通称は忠右衛門。別号に桃青・花桃園など。京都で北村季吟に学び、江戸に出て宗匠となると、深川に芭蕉庵を結ぶ。俳諧紀行文『野ざらし紀行』『笈の小文』『おくのほそ道』など、句集『冬の日』『猿蓑』(没後刊)など。

八 其角 俳人宝井其角。享保十九年五月一日▽(第四回)参照。

九 嵐雪 「服部氏。雪中庵。其角とやらんで芭蕉の高弟。宝永四年、五十四歳で没」(老郡)。俳人服部嵐雪。承応三(一六五四)年生、宝永四(一七〇七)年没。通称彦兵衛、別号嵐亭治助・雪中庵・寒寥堂・玄峯堂など。はじめ新庄隠岐守に出仕、以後転々と諸侯に仕えたが延宝頃、芭蕉に入門。元禄三(一六九〇)年には武士を廃して職業俳人となり、其角と並ぶ江戸蕉門の中心となる。後年禪に帰依して剃髪し、不白玄峯居士と号した。編著に『其袋』、句集に『玄峯集』など。

十 しゆしやう 「殊勝」(柿)「殊勝」(老郡)。

十一 花見車 「花見車四卷 元禄十五年跋」(柿)「四卷。俳諧評判記。轍士著。元禄十五年刊」(老郡)。高島轍士(後出、注十二)著『花見車』(元禄十五(一七〇二)年刊、四冊)は、三都および諸国の点者ら二百余名を遊女に見立て、遊里語で論評。暴露的売名のことから、俳人北条团水(寛文三(一六六三)年生、宝永八(一七一一)年)から反駁書『鳴弦之書』が出された。

十二 轍士 「俳人。宝永四年没」(老郡)。俳人高島轍士、生年未詳、宝永四(一七〇七)年没。大坂の人。宗因門。西鶴・团水らと親交があった。また芭蕉を敬慕し、しばしば諸国を行脚、その成果を撰集として上梓した。

十三 鷺水 「タシカ 立團門下青木鷺水」(柿)「青木鷺水。立團門の俳人。享保十八年没」(老郡)。青木鷺水。浮世草子作者、俳人。万治元年(一六五八)生、享保十八(一七三三)年没。通称次右衛門。号に白梅園・梅園散人・

歌仙堂など。京都御幸町通二条上ル町に住み、元禄年間、信徳門（一説に立團門）俳諧・雑俳の点者として活躍。著書に浮世草子『御伽百物語』など。十四 半鱗 享保十九年五月十日▽（第五回）参照。

林半麟追善の夜、桑岡貞佐が語ったことについて書き留めている。赤穂浪士の漸之（小野寺幸右衛門）と放水（岡野金右衛門）はともに貞佐の門人。子葉（大高源吾）は首が短く顔に疱瘡の痕があり、芭蕉も疱瘡の小さな痕があった。其角は嵐雪のところに行く際あいさつをして殊勝だった。俳諧評判記『花見車』は轍士が書き、鷺水も手伝ったという。こうした逸話を書き留めるとは、二代目團十郎は俳諧に並々ならぬ興味を持っていたのであろう。

○十日ニ龍水丈迄遣ス

水国^二追悼^一 苑水^三

水ノキレル夏トオモエド是ハ又^四 ▼には五月十三日半麟子身
[まかり子息へ追善の句と前書]

一 龍水 「茶屋力裏の人カ」「勝間龍水ハ新和泉町ノ家主役、かつ手習指南、
慾なる奇行、武野俗談にしろす」（柿）。勝間竜（龍）水。書家。元禄十
（二六九七）年生、安永二（二七七三）年没。池永道雲（一峯池道雲、享

保十九年五月十日○〔第五回〕参照）にまなび、篆刻にもすぐれた。〔新選漢和辞典〕。「新和泉町に家主役をして、手習指南して、筆名勝間竜水とて、御府内に名高き者あり、市川三升（三代目團十郎）も渠が門弟なり」（馬場文耕著『当世武野俗談』宝曆七（二七五七）年成立、『燕石十種』第四卷、中央公論社、一九七九年収録）。

二 水国 俳人雲津水国。享保十九年五月八日▽（第五回）参照。

三 苑水 庭の水。

四 水ノキレル 水国追善書『雨のをくり』（享保十九年五月八日▽〔第五回〕参照）に収録。

題「苑水」は水国の名に因んだものだろう。水国の辞世句に詠まれた庭の柳¹に対して、水国本人は夏の日、枯れていく庭の水のように世から去ってしまった残念な気持ち¹を詠んでいる。「是ハ又」という表現は「是はまた残念だ」という気持ちを込めて詠んだのであろうか。

この句および次項の「又ノ夏」はともに湖十郎で開催された句会で詠まれたものだろう。そのためどちらも題に水に関する語句が選ばれたか。

本句は水国追善として詠まれており、半麟子息追善の句とする「栢庭日記」▼の注は誤りだろう。

1 享保十九年五月八日▽（第五回）参照

○十三日二遣ス

荷葉子^一へ餞別^二 活水^三

又ノ夏江戸へ車ヤ水ノ淀^三

- 一 荷葉子 未詳。享保十九年五月一日○(第四回) 参照。
- 二 活水 よどむことなく流れ動いている水。
- 三 水ノ淀 淀水。ヨドミズ。よどんで流れない水。

荷葉子への餞別句の題「活水」は前項の「苑水」を踏まえたもの。前者は水が消えるが後者が移動し、流れるさまを詠んでいるか。水国の追善句の「是ハ又」を受けて「又の夏」といい、荷葉子に来年の夏に戻ってほしい気持ちを詠んでいるか。

○十三日 庄介^一楽ヤへ来リ 三右衛門^二コト云分 病気快
 氣二付近日舞台へ出スハツ 三右衛門ト女房ガ文ノ云分
 其文ヲモ見スル 其日大坂キウトクへ書状出ス

一 庄介 「庄介ハ表方なるべし 後ニ出」(柿)。江村庄介、市村座の金主。

馬場文耕著『当世武野俗談』(宝暦七(一七五七)年成立)に詳しい。享保十九年十月六日○(未刊)参照。

二 三右衛門 立役者二代目嵐三右衛門。享保十九年正月六日▽(第一回)参照。

三 舞台 享保十九(一七三四)年五月市村座公演「八棟菖源氏」。

四 キウトク 俳人椎本才麿。明暦二年(一六五六)生、元文三年(一七三三)没。谷氏。通称八郎右衛門。初号則武。別号西丸・才丸・旧徳・松笠軒。一切経堂・特小僧・春理斎・狂六堂。宇陀藩家老佐々木主水の養子となったが故あって浪人し、一時仏門に帰す。俳諧ははじめ西武門のち伊原西鶴門。延宝五(一六七七)年、東下して江戸の俳壇談林と接触し、俳壇の驍将として小西来山と並んで活躍した。処女撰集『坂東太郎』(延宝八(一七八〇)年)『国史大辞典』。

伊原青々園は「庄介ハ表方なるべし」として庄介を木戸番など担当する表方とするが、ここでは金主江村庄介だろ¹。三月から舞台を病欠している三代目嵐三右衛門の舞台復帰を懇願する手紙を持参したという²。

旧徳(椎本才麿)は初代團十郎の俳諧の師。二代目團十郎は才麿から「才」の文字を借りて、俳号才牛を名乗った。

1 拙著『二代目市川團十郎の日記にみる享保期江戸歌舞伎』(文学通信、

二〇一九年刊)参照。

2 享保十九年三月十一日〇(第三回) 参照。

▽十四日 笠翁より返事来る是も七十余也 貞佐物語

水国去る頃 其角の発句有 文台をもとめ 出所不知

よし 其本とを貞佐知れりと 豆人所持の文台の由

豆人は今上方にあり 発句は

つのもしの伊勢の

水国たしか川田屋にてもとめたるよし 是は里郷はな

し

一 笠翁 「小川破笠」(柿)。「小川破笠。のち笠翁。蕉門の俳人で、画を英

一蝶に学び、蒔絵・象眼をよくする。栢庭の雅友。津軽侯に使える。延

享四年、八十五歳で没(老郡)。小川破笠。俳人、蒔絵師。寛文三(一六六三)

年生、延享四(一七四七)年没。伊勢(現三重県)出身。名は観。字は尚行。

通称は平助。別号に宗宇(羽)・笠翁・卯観子・夢中庵。江戸で俳諧を福

田露言、松尾芭蕉に学ぶ。画は英一蝶の門下とも。漆芸に秀で、漆器に貝

釘、牙角、堆朱、陶片などを嵌入した破笠細工とよばれる独特の蒔絵を作

た。

二 貞佐 俳人桑岡貞佐。享保十九年五月十日▽(第五回) 参照。

三 水国 俳人雲津水国。享保十九年五月八日▽(第五回) 参照。

四 其角 俳人宝井其角。享保十九年五月十日▽(第五回) 参照。

五 文台 「此力文台は後に栢庭所持 類焼後新宅祝の百韻二用ひしす別記

あり」(柿)「のちに栢庭の所持するところとなる」(老郡)。

六 豆人 未詳。

七 つのもし 「牛の角文字」の略。平仮名の「い」の字。

八 伊勢の「野飼の花すゝき」(柿)「落字あるべし」(老博)「活東子云伊

勢云々下文落字あり又里郷の郷一本に江とあり」(老内)「津のもじの：

其角の句『角文字や伊勢の野飼の花すゝき』(老郡)。この句は嵐雪編『其

袋』(元禄三(一六九〇)年刊)に収録、詞書で其角が伊勢に旅したとき

に詠まれたとされている。「野飼」は、ここでは野生の芭か。

十里郷 「後二出」(柿)「市村座の支配人か」(老郡)。享保十九年九月四

日〇(未刊) 参照。

水国は晩年、其角の句「角文字や伊勢の野飼の花すゝ

き」¹が書かれた文台を入手した。角文字は平仮名の「い」

の意で、ここでは伊勢の「い」に掛けているか。其角の

旅中に見ている秋の景色を詠んだものだろう。

文台は上方にいる豆人が所持していたが、後に二代目

團十郎が入手し、愛蔵していた。²

1 嵐雪編『其袋』(元禄三(一六九〇)年刊) 収録。

2 「文台は黒塗にて蒔絵薄に月 其角自画讃也(角文字や伊勢の野飼の花

薄)」(池須賀散人著『市川栢庭舎事録』明和六(一七六九)年序、『資料

集成二世市川團十郎』収録、和泉書院、一九八八年刊)。

○夜 大久来ル 今日湯治ヨリ帰りタル由 大山へ参詣
ノ者 カナラズミノゲ越スヘカラズ モシカラ身力チ
ニテ行ン者ハ各別也 駕籠ニテ行者カナラズ無用ナル
ヨシ モトヨリアシヨハナレ ケツシテトルマジキ
山路也ト 是曾我ノ中村ヘカ、ル道也 湯治ナドヨリ
モドリニカ、ル道歟 信州浅間モカナラズ心スベキ山
也 新車モコリハテタルヨシ物ガタリ 予 善光寺参
詣ノ時道々聞 クツカケトヤラニテ所ノ者ニ聞ニ 麓
ノ者サヘトミメタリ 下カゲ森ノ宿ニテ 八十計ノ老
人 是モ参詣ヲトミメタリ 必心得ヘキコト也

一 大久 「大黒屋久左衛門カ茶屋の主人ならん 又々按明和五年、男色三の朝に大黒屋久左衛門、堺町楽屋新道にあり『いけす』と口書す 料理屋カ」(柿)。芝居町の案内書『男色細見三の朝』(風来山人著、明和五〔二七六八〕年刊、伊原青々園編『歌舞伎年表』収録)には「大黒屋久左衛門 いけす」があるが、堺町楽屋新道ではなく西江六軒町に位置する。この案内書は日記記述より三十年後に刊行されたもので、住所も名前も違うので、大久は青々園という大黒屋久左衛門ではないだろう。大黒屋久左衛門は芝居茶屋大黒屋久兵衛の亭主で、二代目團十郎一家と親しい関係にあった(享保十九年正月二十七日▽〔第一回〕および拙著『二代目市川團十郎の日記にみる享保期江戸歌舞伎』〔文学通信、二〇一九年刊〕参照)。

二 大山 神奈川県中部にある山。標高二二五二メートル。古来、修験道場として知られ、頂上に雨乞いの神の阿夫利神社、中腹には大山寺がある。雨降山。阿夫利山。

三 ミノゲ 大山養毛越(現神奈川県秦野市養毛)。

四 曾我ノ中村 下曾我村(現神奈川県小田原市東部)。

五 信州浅間 浅間山。長野・群馬県境に位置する活火山。標高二五六八メートル。

六 新車 「市川門之助」(柿)。初代市川門之助の俳号。元禄四(一六九二)年生、享保十四(一七二九)年没。二代目團十郎の門人。長之助、弁次郎を経て門之助を名乗る。若衆方として知られる。

七 善光寺 長野県長野市にある定額山善光寺。「信濃善光寺」ともいう。近世以来、天台宗大勧進と浄土宗大本願が共同で住職を務める。創建年不詳だが、平安時代後期の文献に名が見られる。江戸時代には「一生に一度は善光寺参り」といわれた阿弥陀信仰の霊場で、現在も多くの参拝客が集まる。

八 クツカケ 「沓掛」(柿)。長野県東部、軽井沢町中軽井沢の旧称。かつては中山道の軽井沢と追分の間にあった宿駅。浅間三宿のひとつ。

九 森ノ宿 未詳。山小屋か。

二代目團十郎は登山や温泉旅行を好んだ。また、八十歳の老人について記す。二代目團十郎は長寿老人と出会いについての記述が多く、養生に対して高い意識があったのだろう。

1 享保十九年四月四日○(第四回)には山梨県身延山へ旅した。

○十五日朝 素丸^一丈ヨリ手紙 十九日廿日ノ内見物無心
則廿日ト返事ス 十九日ハ習魚^二丈見物 十六日ハ前川玄
智^三老見物 寿キ人ホドメテ度ハナシ ヨリテ水国^四ヲオ
シム 昨十四日 龍水^五子ヨリ 水国終焉記^六ヲモラフ
死生命アリ 玄智ハ八十余 習魚丈ハ七十余八十二才
カシ 予モ長寿ノ工夫ノミ

一 素丸 俳人二代目溝口素丸。享保十九年五月十日○(第五回) 参照。

二 習魚 俳人。俳人初代溝口素丸(可夕、長谷川馬光)の父、享保十九年五月十日○(第五回) 参照。

三 前川玄智 未詳。

四 水国 俳人雲津水国。享保十九年五月八日▽(第五回) 参照。

五 龍水 俳人勝間龍水。享保十九年五月十日○(第五回) 参照。

六 水国終焉記 水国追善書『雨のをくり』の序文。享保十九年五月八日▽
(第五回) 参照。

二代目素丸から歌舞伎の招待を求められ、二十日に招待するとした。十九日は初代素丸の父習魚を、十六日には前川玄智を招待したという。

前日、水国の追善句集が届けられた。二代目團十郎はひとの生き死について考えただろう。前川玄智が八十歳過ぎ、習魚も八十歳に近いとして、ここでも二代目團十郎は長生きを心掛けるとする。

* * *

享保十九年五月八日から十五日の日記には、知人の死や別離の記述が多く、俳人や俳諧に関係する逸話を多く書き留めていた。また自らの長寿を願っていることがわかった。二代目團十郎は日頃から俳諧と養生に強い関心を持っていたのだろう。しかし同時に、能の話も書き留めるなど、五十歳目前の二代目團十郎が歌舞伎に対してもひたむきに取り組む姿が窺えた。